

11月23日(日) MUNAPOKET COFFEEHOUSE 「水」

菊地奈々子

14時～A 17時～B

世の中の水が枯渇していき自己犠牲により命を紡いでいく物語。カズオ・イシグロ氏の小説「私を離さないで」を想起させるストーリーだった。演者たちは演劇愛にあふれています的なオーラを放ち、個性を競い合っているかのようだった。

主題ははっきりとしていて、過程において様々微細に工夫がなされ、結末へと進んでいた。コップの中の水の色が変わっていく過程、動物から人へと犠牲が変わっていく過程、生気のない花たち。新たな命の誕生と、落としていかねばならぬ命と。

頭で考えれば、水は循環しているもので雨が降り続ける限り永遠に存在する。しかし、飲用水が何らかの理由で減少していくのだろう。(その説明があったのかもしれないが、筆者は理論的なことを拒否する傾向があるので申し訳ない。または、物語にはその説明はすでに要らないものとして設定されたのかもしれない。)

「だるまさんが転んだ」シーンは、劇作者がトークにおいて、好きだから取り入れたと聞いた。そのシーンもラストのラップで心を表現するシーンも、1回目見たときは多少違和感を覚えたが、2回目見たときに何故かじっくり聞いていたのが自分でも不思議。劇になじんだのだろうか。劇作者は舞台を退屈せずに観客に見てもらおうというサービス精神が旺盛なのだと思う。「だるまさんが転んだ」シーンは昔の「夢の遊民社」の役者たちを思わせた。他にも死んでいった(と思われる)人たちがゆらゆら動きながらセリフを言うシーンとか。子役も元気があり上手に演じていて拍手を送りたかった。

冒頭のパーティ?シーンでは、冗句を言って笑いを取ろうとしたのだと思うが、演技がオーバー過ぎたか?逆に笑えないシーンになってしまっていて、そこは一捻り欲しかった。

現在の演劇では舞台装置が映像シーンに代わっていくんだなあとおつくづく感じた。

テーマについては、もう少し考えたい。タイトルは「水」。しかしロゴは漢字の水ではない。人間が未来を生きていくには様々な問題がある。今でさえ、様々な環境問題が叫ばれている。「水がこの世から無くなったら～」という発想で生まれた物語かもしれない。興味深い発想だ。人の体の90%が水分でできている。私たちが日々食べている野菜だって殆ど水。水が無くなれば次世代に自分の肉体をささげればいい。それは愛だ。この物語は愛の物語。

最後(後半)のシーン、赤子が成長していく(=生き延びていく)時間は、長いな、と思った。そんなに水が足りたのだろうか、という疑問は愚問だろうか。子役はとても頑張っていた。ラップも上手だった。気持ちがよく表されていたと思う。

MUNA-POCKET COFFEEHOUSE

「水」

2025/11/23 14:00-回 CAST A

まず劇団のホスピタリティに感心する。受付から案内、前説と丁寧な観客側に立った制作マインドがとても良かった。この回は本編前に世界観をいっしょにしたスピンオフ作品の上演があり、こちらも良かった。心地良いテンポで本編で繰り返される水の大切さを観客に植え付ける。

本編はこれまでの MUNA-POCKET COFFEEHOUSE 作品のようにタイトルである「水」を徹底的に粘着して前に進むような展開。近未来 SF の様相である。近年、報道でも取り上げられることの多くなった「当たり前にあると思っていた水」への不安の行き着く先が描かれていく。その描き方は、グラデーションのようにいくつかのパートにより変化していき、そこでの人間の生き様を独特の表現で描いていく。愚かしさと狂気、絶望、そして最後に愛。歌であったり、身体表現だったり、コント的に見せていくスタイルは作・演出の真骨頂である。また、映像を使用した舞台演出も見事であった。

作品の持つ独特の世界を役者陣・スタッフチームと共有して、一つの世界を描いたことに成功し、舞台を力強いものにしていった。

MUNA-POCKET COFFEEHOUSE >|< (11月23日(日) CascA:14:00~/ CastB 17:00~)

舞台に関わる皆様の熱量をすごく感じました。

演劇でできることのすべてを、真正面から、そして緻密にやり切る姿勢から、演劇でやる必然性を強く感じさせられました。見ごたえしもなく、ただ「おもしろい」と感じるだけで終わらせてもらえない、強い引力のある公演だったように思います。

全体を通して見た時に、テーマはかなり重ためで、争いや人間のエゴといったものを正面から扱っている作品だと感じましたが、それを重たく書きすぎず、かといって軽くし過ぎない、そのバランス感覚が非常に巧みでした。重く書きすぎると、刺さる人には刺さりすぎて苦しくなり、そうでない人には距離を置かれてしまいがちですが、そうならないギリギリの線を保っていたように思います。このあたりは、作風としての一貫した強さを感じました。

また、メッセージ性が非常に強い公演だったと思います。前提として「おもしろい」「見ていて引き込まれる」という感覚がありながら、その先で「目を離せない」「見届けなければいけない」「考えなければいけない」「受け取らなければいけない」と感じさせる力がとても強かったです。こういうことが伝えたいのだろうな、と理解させる作品は多くありますが、それ以上に観客を離さない作品はなかなかなく、本当にすごいことだと感じました。演劇を通して伝えたいメッセージがはっきり定まっているからこそできる表現なのだろうと思います。

賑やかでわちゃわちゃとした、少しカオスな状態から始まり、物語が深まるにつれて色彩や温度が失われ、テンションが落ちていく過程は、その落差がある分、絶望感やえぐみをより強く感じさせるものになっていました。おもしろいと思って見ていたところから一気に落とされる感覚があり、その展開には正直くらいました。

演技面はもちろん、役者の人数や配置、色味といった視覚的要素も含め、すべてが効果的に使われており、よく考えられていることが伝わってきました。一見するとカオスで、全員の毛並みがきれいに揃っているわけではないのに、不思議と全体としてのまとまりや熱を感じる空間で、その心地よさが印象に残っています。ばらばらでありながら、同じ方向を向いているわけでもないのに、ひとつの塊として成立している、その感覚は熱量によるものなのだろうと思いました。

不透明の幕に影や映像を映す使い方もとても印象的で、他の道具、特に舞台上に散らばっている箱がさまざまな形で活用され、最終的には部屋として立ち上がっていく構造も装置として優れていたように思います。道具の配置が変わっているにもかかわらず、いわゆる「場転している」という意識を強く持たせずに物語が進んでいく点にも工夫を感じました。

小道具もしっかりと作り込まれており、特に赤ちゃんは工夫を感じました。人がかぶるタイプのギミックも、おもしろくてとても良いなと思いました。

照明についても、幕に影を映す表現や、歌の場面でライブ感が一気に高まる照明など、印象的な使い方が多くありました。色数や発色自体は鮮やかだったと思いますが、全体として場面に合った使い方になっており、違和感を感じることもありませんでした。物語の性質に沿った効果的な照明の使い方ができていたように思います。

終盤の演出については、「無色透明」という概念を舞台上で立ち上げる難しさを強く感じました。水が映し出される場面はとても美しく、感情的にも強く心を打たれる瞬間だったのですが、もしそこで「無色

透明」という状態そのものが、もう一段階明確に表現されていたら、さらに大きな衝撃になっていたのではないかと感じました。水はイメージとして「青」で捉えられることが多く、海などを連想する色味として非常に分かりやすい一方で、実際には水そのものは無色であるというズレも含んだ表現だからこそ、難易度の高い挑戦だったように思います。

また、一部のシーン、特に後半にかけては、音響によって感情や状況を補強しているように感じられる場面があり、「ここでこの音が入るのか」と意識が向いてしまう瞬間もありました。役者さんの演技やその場の空気感が非常に強かった分、あえて無音、もしくは音を極限まで削った状態で勝負しても、観客は十分に引き込まれたのではないかと感じます。音響が不要というわけではなく、それだけ役者さんの表現が信頼できるレベルにあったからこそ、静けさ自体がより強い力を持ち得たのではないか、という期待を込めた感想です。

「○○劇のような時代だった」という表現を、単なるたとえで終わらせず、きちんと意味のある説明と演出に落とし込んでいた点も印象的で、さまざまな劇の形式を見せてもらえた満足感がありました。それぞれのパートのクオリティが高く、技術力の高さを感じました。

終盤のラップで本心を吐露するシーンについては、最初は正直、ここでラップを入れるのか、と戸惑いもありましたが、その後の会話シーンがより強く引き立ち、結果的にはとても印象に残る流れになっていたように思います。リズムが綺麗すぎないことで、言葉の生々しさや必死さが伝わってくる部分もあり、難しい表現に挑戦しているからこそその良さも感じました。一方で、CastA で観させていただいた際には、個人的にリズムの気持ち悪さを感じてしまい、そちらが気になってしまった側面もあるのでバランスが難しいなと思います。

役者さんは全体的にレベルが高く、基礎の練習から脚本への向き合い方まで、妥協せず真摯に取り組んでいる姿勢が伝わってきました。CastA CastB で雰囲気が大きく異なっていた点も非常に面白く、キャストが変わることで作品の見え方がここまで変わるのかと改めて認識させられました。

ここからは好みの話になりますが、CastA のアメ テルの関係性が特に好きで、絶妙な距離感でありながら、お互いのことをちゃんと大切に思っていることが伝わってくるのがとてもかわいらしかったです。演劇の良さがこれでもかというほど詰め込まれていて、心に強く響く作品でした。

「大人の階段」

(11/23…11 : 00、14 : 00 MUNA-POCKET COFFEEHOUSE 「水」)

昔、♪大人の階段上る～という歌があった。階段を上る時は皆、前を向いている（当然だ）。「過去の思い出や真実」を頭の中で描くことはあるが、実際に後ろを振り向きながらは登れない。ま、たまには下ることもあるかも知れないが、結局は「成長という時間軸」との兼合いで上ってしまう。透明でいろんな方向に無数に存在する階段のどの一段を上るかは、その人のその瞬間の選択となる。どれを…？

「選択」という意味では“扉”は、“階段”に似ているが、こちらの方がもっと能動的な感じがする。開けるための意思と入るための勇気、そして、後に閉じられてしまう覚悟。扉の先にある“何か”を求めて開け入る。

有名な「どこでもドア」（ドラえもん：1969）は、夢の“瞬間移動”が出来る。しかもリスクは0（漫画上は）。これは本当に夢の代物だ。

それに対して「真理の扉」（鋼の錬金術師：2001）は、それに正対し開けるために多大な代価を払うこととなる（等価交換の理）。右腕を、内臓を、身体自体まで「もってかれる」こともある（漫画上は）。が、人には、そこまでして（禁忌を犯して）も、“得たい何か”があったりする。

「人は自由の刑に処せられている」（サルトル）

どんなことも“自分のため”という鎖に、縛られる。

この芝居にも、“扉”が出てくる。

何かを後世に伝え続けるために、そこに開け入る。

それが、生きた証なのか、愛なのか、未来への希望なのか…何かを残してゆく。

残された者は、好きでも、嫌でも、飽きても、「自分の意思で」それを引き継ぐ。それは、芝居で切り取られた時空だけでなく、生きている限り永遠と続いてゆく。

「水」とはいろんな命の“源”に違いないものだから。

前述した「鋼の錬金術師」には、錬金術で何でも生み出せる“賢者の石”という“源”が出てくる。

その賢者の石は“人の命”から生成される。

そして、幾千年もそれを護り続ける者がいた。

滝浪倫邦（オトナ青春団）

〈全項目 30 点満点で評価 22 点〉

受付から送出し…4/5

- ・受付は QR コードと紙を使いスムーズ。世の中が慣れて来たのかも。(ただ、QR コードが出せない人とかはいなかったのかな…と心配はする)
- ・別の場所でマルシェが合わせ開かれていたのは良かった。
- ・1 本目と 2 本目の間に「演出のトークイベント」もあったが、かなりタイトなスケジュールとなったため、トークを見た人は、終わった演者とのせっかくの交流が出来なかったようだ。

舞台装置…4/5

- ・画像を使う手法なため、周りは『大きな白いもの』で覆われてしまうのは勿体ないかも。
- ・シンプルな舞台に扉は良かった。
- ・舞台装置として使われているコンテナを、もっと活用できたのではないかと感じた。

照明、音響効果…4/5

- ・舞台が白いと、明かりが気になるが、そこをピンスポにした部分は、良かった。
- ・白幕の後ろが、見づらく、何してるか気になった。(台詞よりも)
- ・今回の舞台の広がり方から考えると、音の大きさは良かった。
- ・配役紹介が、映像で劇中にあるが、分かりにくかった。

演出面など…3/5

- ・芯となる物語は分かりやすかった。
- ・エピソードの賑やかさで、物語が見えにくくなってしまった。
- ・モノログでの説明が多いので、その辺の見せ方が物足りなかった。(パターン)
- ・推したい”シーン”の繰り返しが少しくどかった。
- ・「水が大切」な部分(と思う)で、「水」が雑に扱われている感じがして違和感を感じた。

役者(個人) …4/5

- ・よく動きよく話していた。(訓練されていた)
- ・テンポ良い部分が沢山あった。
- ・”遊び心”が”悪ふざけ”になった部分もあった。(演出?)
- ・ストップモーションが止りきれてなかった。
- ・ラストの無言のひとり芝居は効果的だった。

役者(全体) …3/5

- ・その瞬間のやりとりは見えた。
- ・対話の相手、全体との関係が良く分からなかった。(地位とかも)
- ・こちらが”積み重ねて”何かを感じたい時に、薄まってしまった。

まとめ

多人数の公演であり、画像も多用され、見た目も変化する。その使い方は、上手いと思う。その反面、ひとりひとりの微妙な変化は、お客様に見えなくても良いのか…?と考えた。これが“現代”だよ、と言われたらそうなのかな…とも。たった一粒の水滴が、その舞台という時空を掌握することもあるのではないかと感じた。